慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	終わりなきホロコースト問題 : ホロコースト解釈に関する一考察
Sub Title	Der Holocaust und Kein Ende
Author	中村, 仁(Nakamura, Jin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.72, (1997. 6) ,p.268(21)- 288(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00720001-0288

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

終わりなきホロコースト問題

——ホロコースト解釈に関する一考察——

中村　仁

(I)

戦後50年の翌年，1996年にアメリカで一冊の本が出版された。ハーバード大学助教授ダニエル・J・ゴールドハーゲンの著作『ヒトラーの自発的死刑執行人—普通のドイツ人とホロコースト[1]』である。その論点は，「ホロコーストは，ナチだけではなく，一般のドイツ人の手によって実行され，ドイツ国民はその事実を知っていた。ホロコーストは，まさにドイツという土壌と，ドイツの国民性に根差した反ユダヤ主義の賜物であった」というものであり，戦後50年という節目を経て，ナチの過去の罪に一つの区切りをつけたドイツ社会を刺激するものであった。ドイツでは多くのメディアがこれを取り上げ，歴史家論争ならぬゴールドハーゲン論争が巻きおこった。例えば『シュピーゲル』1996年8月12日33号[2]では特集を組み，ゴールドハーゲンとルドルフ・アウクシュタインとの対談が掲載されている。日本でもこの本がドイツへ与えた影響について，『朝日新聞』，『毎日新聞』などで紹介された[3]。ゴールドハーゲンは，「ナチの犯罪は集団の罪ではなく，個人の罪」であるという立場の人々や，いつまでも過去にとらわれることを忌み嫌い，過去の克服を掲げ歴史を相対化しようとする動きに一矢を報いたのかもしれない。戦後50年を経た今日でさえホロコースト問題は絶えず繰り返し議論の対象となっており，この問題には終わりがないといえるのである。

ちょうど10年前におこった歴史家論争も，直接的にせよ間接的にせよ，当時のドイツ連邦共和国の政治的，文化的状況や，ドイツの歴史やナショ

ナルアイデンティティーを修復しようとする試みと決して無関係ではなかった。この論争の中心となったのは，ホロコーストを20世紀におきた多くのジェノサイドの連続性の中に置き，ホロコーストを相対化しようとする歴史家たちによる企てであった。さらには，「ゾンダーヴェーク」(Sonderweg) という，最終的にはナチズムに至った，リベラル・ブルジョア的西欧とは全く異なる，ドイツ独自の道や精神を掲げる伝統的な歴史観であった[4]。

しかしながらこのような問題は決してドイツに限られたことではない。例えばソール・フリードランダーは，1992年に編集出版した『表象の限界の究明—ナチズムと「最終解決」[5]』で，ポストモダニストのディスクールがホロコーストの歴史叙述の根底を揺るがし，問題化している傾向を知らしめている。

歴史家は自らの対象（歴史）を「写実的に」記述し，「客観的に」分析する。しかしそれは見せ掛けに過ぎず，実際にはその対象を創造するに過ぎない，とポストモダニストたちは批判する。この視点からポストモダニストたちは歴史叙述の方法を問題にする。この書では，その見解の支持者や反対者の双方が，ナチズムとその犯罪にかかわる表象の限界の問題を論じている。それは，ヘイドン・ホワイトの，「言語自体が歴史叙述に修辞形式の限定された選択を強いて，なんらかの特殊なプロット化の様式，説明モデル，そしてイデオロギー的態度をとらせる。しかもこの選択をおこなうのを逃げることはできないところから，歴史的事件を解釈するさいの解釈のしかたの相違が生じてくる。あるひとつの解釈が他の解釈よりも真実であるということを決定するための〈客観的〉，外的基準は存在しない」，とする立場[6]から，カルロ・ギンズブルクの，「個人の目撃証言に基づいた，より重要で具体的な歴史的現実を猛烈に擁護する」，という立場[7]にまで及ぶ。フリードランダーが指摘するように，「ポストモダン的な思想は，言語的構築物の恒常的な多義性と自己言及性をこえたところでなんらかの安定した現実や真実を同定しうる可能性を否定するところから，ホロコーストの現実や真実を確定する必要があるという要請に挑戦状

をつきつけている[8]」といえる。

確かに，生存者，犯行者，傍観者といった関係者による膨大な証拠書類があるにもかかわらず，この本で多く論じられている認識論的問題は残る。マーティン・ジェイは，「ホロコーストは，それ自体，その当時には使われていない事後の概念のあらわれであり，個人の誰一人としてかつて目撃していない，そしてその真実と意味は，我々はこの全く異なった概念の間に関係を作り出そうとするが，個人の証言のすべてを一緒に縫い合わせることによっては，明らかにされ得ない[9]」と述べている。

これらの論争によってますますはっきりしてきたのは，ナチズムやホロコーストを歴史の流れや認識論的問題から切り離し，絶対的，道徳的な価値基準で理解しようとすれば，ますます深刻な事態に直面するということであった。これはマルティン・ブロシャートや，「道徳的に解釈された過去は最終的には真の歴史を破壊する。我々はナチズムを歴史化しなければならない[10]」と書いたトーマス・ニッパダイなどによるナチズムの歴史化を求める声にその兆候があらわれていた。フリードランダーは，このような動きに対して，ナチズムを従来の伝統的な歴史物語の型に押し込むことは，ナチ政体特有で中心的なその先例のない犯罪性や残虐行為から焦点をずらしてしまうと論じた。

このように，ホロコースト・ヒストリオグラフィーは文化，政治状況の潮流の変化の中で，絶えず揺さぶられているのである。ダン・ディナーは，「アウシュヴィッツは人間の理解が及ばない領域であり，説明のブラックボックスであり，超歴史的な意味の真空であり，歴史叙述の試みを吸い取ってしまう。…究極なケースとして，従って絶対的な歴史基準として，この出来事はほとんど歴史化され得ない[11]」と書いた。しかしながらこのような主張は論点を非常に曖昧にしてしまう。ホロコーストを特異なものとして，通常の歴史枠から隔絶したいという衝動は，心情的には理解できるが，ホロコーストをいわば超歴史的なものとしてとらえたり，理解し難いものとしてとらえていては，この未曾有の出来事は，今後ますます不当な解釈にさらされることになるであろう。アーノ・J・メイヤーは

こう書いている。「問題はもはやユダヤ人大虐殺を再評価するか，歴史化するかどうかということではなく，むしろ責任を持ってそれらをいかにやるかということなのである[12]」。

私はナチ強制収容所という非人間的な極限状況下で生まれた詩を研究対象としている。それらの詩は通常の語義的な解釈によっては理解しきれないものを内に含んでいる。それ故，詩の解釈のための前提として，ホロコーストの歴史的な意味を考察する必要がある。そこでその一助として，以下本稿では，ホロコーストに関する解釈のいくつかの考察を試みてみたい。

(II)

「ホロコーストは，ほとんどの歴史が歩むような道を進むことを拒絶する。それは，六百万のユダヤ人の殺戮という，破壊の巨大さのためだけでなく，それを取り巻く様々な出来事が，全く現実的な意味で理解不可能だということからでもある。こんな規模の殺人がどうしておこり得たのか，またおこることを許されたのか，このことを完全に理解する者は誰もいない。事実を積み重ねたところで，これへの理解が生まれることもない。つまり，理解の可能性自体，決してありえないのかもしれない[13]」とノーラ・レヴィンは述べ，エリ・ヴィーゼルは「アウシュヴィッツを説明することができない」のは，「ホロコーストが歴史を超越しているからである[14]」と述べている。にもかかわらず，否，正しくそれゆえに，ホロコーストの理解を試みる様々な歴史解釈を生み出してきたのである。「今や，我々は，ホロコーストに関する膨大な文献を有している。実際，この分野は，今となっては，どの研究者にとっても，全体を把握するにはあまりに広大すぎる。ある最近の選択文献目録では，本の項目だけで二千近くあり，アウシュヴィッツに関する出版物だけでも，一万を優に越えている[15]」とマイケル・R・マラスは指摘している。

しかしながら，もしこのような多種多様な，そしてしばしば相容れないホロコースト・ヒストリオグラフィーの試みの中に，何らかの統一的な要

素を見出そうとするならば，それは，ホロコーストを，比較歴史学のプロセスの中に，つまり，より多面的で複合的な説明や状況を十分に加味して，それらを統合しようとする試みにあるといえる。これらの研究が積み重ねられれば，反ユダヤ主義を絶対的なものとしてみたり，ホロコーストの源泉を解く唯一の鍵やホロコーストへと至った原動力とみなすような古い見解は修正されるかもしれない。以前，ハンナ・アーレントは，「この永遠なる反ユダヤ主義なるものは，ほとんど二千年にわたるユダヤ人憎悪の歴史の裏づけがある以上，その正当性を認めなくてもごくありふれた問題としてこれを受け取ることができる。反ユダヤ的歴史家がこの種の理論を職業的に利用したことについては説明の要もない(16)」として，「永遠なる反ユダヤ主義」を掲げる歴史理論の欠点を指摘した。反ユダヤ主義の帰結としてのホロコーストには何ら特別な説明はいらない。ホロコーストの原因を単にドイツの反ユダヤ主義の歴史だけにみるのは安易であろう。しかしまた反面，反ユダヤ主義がホロコーストの不可欠な前提条件であったことも事実である。伝統的な反ユダヤ主義からのアプローチには慎重で綿密な態度が必要である。

ところで，現在の反ユダヤ主義の立場からの研究はいかなる結果を出しているのだろうか。反ユダヤ主義の歴史的影響の解明を進展させているというよりは，むしろ，ホロコーストへと直線的に導いた推進力としての反ユダヤ主義の連続性や普遍性を際立って問題にしてきた。ヒトラーの異常なほどの反ユダヤ感情がホロコーストの前提に必要不可欠であったことは自明となっているが，一般の人々と反ユダヤ主義の関係はあまりはっきりしないのである。1933年以前のドイツや第三帝国に関する地域調査研究は，ドイツ社会内で均質的で強烈な反ユダヤ主義の嵐が吹き荒れていたのではなく，むしろ地域や年代によりその程度の差異が大きく異なり，一様ではなかったという実像を示している。多くの地域研究が示すところによれば，人々は「ナチズムに魅了されたから，反ユダヤ主義に引かれていったのであって，その逆ではない(17)」ということだった。さらには，ナチの台頭に決定的な時期（1929-33年）に，ナチは人気や名声を獲得するた

めに，故意に反ユダヤ主義のプロパガンダを弱めたという，オデド・ハイルブロナーの調査結果もある[18]。リチャード・F・ハミルトンは，ナチは「反ユダヤ主義が，その土地で使えるテーマでなければ，軽く扱うか，全く使わないかである。しかし状況が逆ならば，それには，かなりの役割が与えられたのである[19]」と結論づけている。概して，反ユダヤ主義からホロコーストへの道筋には明瞭な関係は見い出せなかった，とマイケル・R・マラスは指摘している[20]。

さて，ホロコースト問題は最近ではどう解釈されているのであろうか。ホロコーストを考察する視点をどこに置こうとしているのだろうか。冷戦体制が終わった現在，世界各地で民族問題が紛争化している。そのためか，一部の歴史家は民族浄化という一般史の観点からホロコーストを検討し始めている。追放や再定住政策からジェノサイドに至る残虐行為といったさまざまな民族浄化の動きは，特に今世紀におきた二つの大戦という野蛮な状況と関係づけられる。第二次世界大戦中に，そして戦後直後におこなわれた民族浄化は，ポーランド人，スラブ人，ドイツ人，セルビア人，クロアチア人，ウクライナ人を含めた一億人以上もの人命に影響を及ぼしたともいわれる。例えばアンドレアス・ヒルグルーバーによると，ホロコーストは，特に非人間的な戦争という流れの中での，民族浄化というヨーロッパに顕著な不快な一面としてみなければならないという[21]。

この論理構成は一般的で説得力があるように思えるかもしれないが，これらの民族問題は必ずしもジェノサイドに至らず，この一般化された説明ではなぜユダヤ人がナチのジェノサイドの餌食となったのか説明がつかない。この文脈でホロコーストを解釈するものには修正主義的な傾向のものが多い。ここではその一例として，アーノ・J・メイヤーを取り上げてみたい。彼は，『なぜ天は暗くならなかったのか[22]』の中で，ユダヤ人が大虐殺された原因を解明しようと試みている。「歴史における〈最終解決〉」という副題が示しているように，メイヤーは自ら Judeocide（ユダヤ人虐殺[23]）と呼ぶものを，可能な限り歴史的文脈や説明構造の中に置き，分析しようとしている。ユダヤ人虐殺は，他の主要な歴史上の動乱，つまり

は1095-99年のキリスト教徒による十字軍遠征や，1618-48年の30年戦争に同質の特徴を持つと，彼はいう。30年戦争は，「ヨーロッパの伝統的基盤が，全面的な恐ろしい戦争の原因と結果であった市民や政治社会の危機によって揺さぶられた[24]」という点において，20世紀におきたホロコーストの生き写しである，というのである。しかしメイヤー自身は，17世紀の30年戦争と彼のいう20世紀の30年戦争（ホロコースト）で行われた組織的な残虐行為の本質やスケールの違いを認識しているので，自分の立場をあまり全面には押し出していない。

メイヤーのもう一つの比較こそ，この論文の中心ともいえる主張を含んでいる。ちょうど古代以来初のユダヤ人大虐殺が11世紀末の十字軍に密接に結びつけられたように，彼は20世紀のユダヤ人大虐殺を1941-45年のボルシェヴィキに対するナチ十字軍と重ね合わせた[25]。十字軍の本来の標的はイスラム教徒だったのであり，ナチ十字軍にとってはボルシェヴィキやソ連のマルキストが最終的な真の敵であった。両ケースとも，彼の見方によれば，ユダヤ人虐殺は本来の計画が頓挫したことによってもたらされた副次的な結果として生じたことになる。国防軍が勝利していたならば，ユダヤ人の組織的な殺害は続かなかっただろうし，最終的にはユダヤ人はロシアのもっと内地にあるいは海外の植民地に送られたであろう，とメイヤーは述べている[26]。ボルシェヴィキ勢力に対する攻撃が失敗し始めた時，つまり1941年の晩秋，東部戦線が泥沼化し，真の敵にますます接近しにくくなった時，ジェノサイドの様相を呈することとなった，というのである。

この見解には解釈の点で問題がある。例えば，メイヤーは1941年の晩秋，ドイツ人の失望感により突如としてジェノサイドの方針が生まれたというが，それに関する証拠を全く挙げておらず，また早ければ1941年３月から始まったとも考えられる殺害の組織化を決定した日付けの特定には諸説あるといった事実に何の注意も払っていない[27]。その決定は夏の間になされたものであって，差し迫った敗北による絶望感や挫折感によるものではなく，むしろバルバロッサ作戦の初期の勝利の陶酔感のうちになされ

たとみなす説もある[28]。この決定を取り巻く状況は，依然として闇につつまれたままである。バルバロッサの黙示録的な状況にもかかわらず，陶酔感と失望感だけの理由では不十分であるように思われる。まず第一の選択肢としてジェノサイドが何故生じたのか，その根底にある要因を彼は考慮するのを回避しているからである。

メイヤーはさらに，1095-99年の場合と同様に，1941-45年の間のナチによるホロコーストは本質的に屈折の行動であり，ユダヤ人が最も容易に手の届きうる犠牲者であって，真の敵に到達し打ち負かすことができないことに苛立った，挫折感をもったナチによって行われた一種の代理の大量虐殺だった，という[29]。しかもユダヤ人が標的とされたのは，彼らがボルシェヴィキの制度やイデオロギーの主たる伝道者として考えられたからであるというのである[30]。

以上のようにみてくると，メイヤーの論文は視野の狭いイデオロギー的なものであり，ナチズム体験のどの局面をも，本質的には，一種の反ボルシェヴィキに還元してしまっている。ナチズムは明らかに反ボルシェヴィキであった一方，しかし単にそれだけではなかった。ナチの反ユダヤ主義を反ボルシェヴィキの一種とすることは，ナチの特異性の多くを排除することになる。ナチズムは同様にリベラル・デモクラシーや啓蒙主義的伝統に対しても軽蔑的であった。ジェフリー・ハーフによると，ナチには新世界の秩序を描いた一つの壮大な計画があった。ナチズムはマルクス主義的思想やリベラルな思想に取ってかわる，既存のものとは異なった急進的で現代的なことを実施しようと模索していた[31]。その一つは人種生物学政策であり，世界の再編成化というヴィジョンから生まれたのであった。ナチは，この大規模なスケールの刷新と根絶を断行する優生学計画を実行に移したのである。これはボルシェヴィキとは何らか関係のない民族やマイノリティー（ドイツ民族自身の中でも不純な要素を含んでいる者）に施されることになっていた。ダニエル・J・ゴールドハーゲンは次のように指摘している。

「ナチが，ユダヤ人を人種的に汚染しているものとみなしたり…肉

体的に衰弱しているドイツ人を断種にしたり，精神病のドイツ人を殺害し，ジプシーを大量虐殺し，同性愛者たちを抹殺し，ポーランド人のインテリゲンチアの絶滅をはかったり，ボルシェヴィキ国家だけではなく，そのロシア国民までも根絶やしにしようとしたり，この黙示録的な企ての絶頂としてキリスト教会の一掃をと考えたのは，反ボルシェヴィキ主義が原因のためではない。[32]」

(III)

マイケル・バーリやヴォルフガング・ヴィッパーマンは，この人種生物学の視点から，ホロコーストを分析し，解釈している。彼らによると，第三帝国は歴史上そのドグマと実践が民族至上主義である初の国家であった[33]。バーリとヴィッパーマンは，ナチがドイツ民族共同体に対しては積極的な出産奨励と社会福祉政策をとり，反面「異常な」要素と「望まれない」要素を徹底して排除する政策をとったことを対照させながら，様々に組み合わされた包含と排除の尺度によって特徴づけられたこの人種生物学政策のヴィジョンが，徐々にナチの計画を実施する手段となったことを詳細に示している。1941-44年の間にナチはロシアで700万以上もの一般市民を殺害し，ポーランドでは，その数は非常に揺れ動いているのであるが，80万から240万もの非ユダヤ系ポーランド人を殺害したといわれているが，これもその一環と考えられる。バーリとヴィッパーマンは，ユダヤ人憎悪が蔓延したことによって，そのユダヤ人憎悪が人種社会の優生学のヴィジョンの道具として取り込まれ，統合されたと主張している。ユダヤ民族全体の絶滅計画はユダヤ人にのみ残されていた。ユダヤ民族絶滅計画は再生力と殺人の可能性をうちに秘めている優生学の枠組みの中に存在したのであった。

さらに，この優生学計画を文書で証明し，ホロコーストとの関係を裏付けようとする研究がかなりあり，強制断種に関するナチの目論んだ計画や規模がかなり明らかにされた。1934年から大戦勃発までの間に，約35万人ものいわゆる遺伝病のドイツ人が（人口の0.5%に当たる）このような手

続きを受けた[34]。安楽死計画は，方法や人員の両面でホロコーストと密接に結びついていった。いわゆる「価値のない生命」の根絶は，公式には1939年10月から1941年8月までの間に行われ，9万3千人もの身体障害者の命を奪った。T4本部[36]で安楽死計画が中止されると，全面戦争下の東部へと向けられることになった。その方法は，このT4作戦の流れをくんでいた。ドイツでこのT4作戦の仕事に従事していた者，例えば鑑定医などは，東部の強制収容所に派遣され，そこで病人を選り分け死に追いやった。絶滅収容所では精神病者に使われたガス装置を改良したものをユダヤ人への使用のために設置した[35]。また特殊行動部隊が，パルチザンとして活動しているコミュニストやユダヤ人を一人残らず殺すように命じられていたが，同時にジプシーや精神病患者も殺した[37]という事実をも思い起こす必要がある。

そしてこの優生学計画の普及，計画，実行に従事したのが，専門家たち，つまり法律家，公務員，大学人，自然・社会科学者などであった。近年，このヴィジョンを定義し，それを実行に移す際の医師たちや医学の中心的な役割が，ますます関心の的となっている。

他の専門家集団と比較して，医者は最初からナチ党内で重用された。医師たちはあらゆる面で大量虐殺にかかわり，巻き込まれていった。例えば，東部にいる医師団は兵士や警察に，面と向きあった殺害の効果的なやり方を指示した[38]。また断種や安楽死計画の考案者であり，唯一の実行者であり，アウシュヴィッツのメンゲレ博士に象徴されるように，ガス室への選抜を行う唯一の権限者であったりした。ロバート・ジェイ・リフトンは「殺人の医学化」こそまさにナチズムの本質であると評している。ナチがジェノサイドへ至ったのは，生医学のヴィジョンやその優生学の中に潜伏していた要因のためであったと，彼はみる。生物学的側面での人類の未来を支配することを担い，由緒正しき人種の血統に対する健康を保証し，病の人間や退歩的な要素を浄化するには，「荒々しい治療」を必然的に伴い，「治療命令」としての殺人やジェノサイドを伴うことになるというのである[39]。

このような側面からのアプローチは，新たな視点からの，ナチ国家の働きやホロコーストへの経緯を解明することになろう。しかしこれらの研究は，ナチ体制内の機能や働きといった点からの断片的な考察であるともいえる。長期的な歴史的側面を考慮していない。今までみてきたジェノサイドの要素は，そのルーツを単にナチズム体験やドイツ史にあるとするのではなく，19世紀及び20世紀初頭の現代ヨーロッパの自己理解に必要不可欠な要素をも含んでいることに注目する思想史家もいる。このような視点からの研究は，ホロコーストを偶発的なもの，あるいは官僚機構の産物，または単に野蛮な戦争の原動力の結果とは考えず，より広い内在的構造から生じてきたものとみなしている。

(IV)

ジョージ・L・モッセの「ヨーロッパの歴史においていかなるものもホロコーストと無関係ではない[40]」という発言は，やや誇張したものであることは疑いないが，ナチズムやその残虐行為を論じる際の様々な研究方向の可能性を指摘しており，ヨーロッパの歴史がホロコーストに陥りやすい構造や精神状態にあることをよく表現したものといえる。

例えば，モッセ自身の，ホロコーストに関するドイツとヨーロッパ史の研究も，変遷している。彼の第三帝国の知的源泉に関する研究は，1960年代半ばに発表されたのであるが[41]，この問題に相互に関係のある側面を三点挙げている。まず，反ユダヤ主義はナチズムの定義として考えられる。ナチズムは特に反ユダヤ革命であった。この反ユダヤ主義は，さらには，特にドイツ民族の現象として分析され，19世紀のゾンダーヴェークの歴史と関係づけられる。そして最後には，ゾンダーヴェークによりもたらされたナチズムと残虐行為の双方は，合理的で，リベラル・ブルジョア的な現代性に対する急進的で不合理なアンチテーゼと解釈された。その後モッセはこの見方を訂正した。まず第一に，この偏狭なドイツのゾンダーヴェークという見方は姿を潜めた。第一次世界大戦は決定的な出来事であり，転換点であった。第一次大戦，敗北，それに伴う野蛮化が，民族的イ

デオロギーや民族主義的ナショナリズムを国家国民の生活の中心へと押し上げた[42]。1914年以前はドイツではなく，フランスにこそ最も有害なファシストの原型や反ユダヤ主義，そして人種差別主義的傾向がみられたと，モッセが指摘するのはそのためである[43]。

モッセは現在ではナチズムを上述のアンチテーゼとしてではなく，ブルジョアびいきの本質的なあらわれとして，ナチの犯罪の根源としてみている。モッセによると，ナチは急進化された形でナショナリズムと中流階級の道徳性との間に，19世紀から続く「世間体」という現代の基準を定義し，内部者（インサイダー）と部外者（アウトサイダー），典型（タイプ）と対型（アンチタイプ），そして「正常さ」と「異常さ」の間に厳格な区別を定めた，より広いヨーロッパ同盟を作り上げる。その道徳性とは，ナチという新人類は，自らの世界を浄化し，その世界を自らが退歩的な力とみなしたものから守ることに邁進した「理想のブルジョア」だった，と彼はいう[44]。ナチズムは，ここでは，他との区分や誹謗に対するより一般的な中流階級の運動の最も急進的な現実化としてあらわれる。身体障害者，精神病者，犯罪者に対する安楽死計画，同性愛者やジプシーやコミュニストに対する虐待や虐殺，そして当然「最終的解決」は，反ブルジョア的行動ではなく，道徳的に，美的にブルジョアのモラルや世間体の根本的な信条を冒瀆するようにみえたこれらのアウトサイダーに対して，秩序，清潔，正直さ，家族の生活の価値を保とうとしている中流階級の発現だった，とモッセは主張している。

このような見方をすると，ホロコーストはまさにヨーロッパのブルジョア社会の原動力という広いコンテクストの中に位置することとなる。これは示唆に富むものではあるが，問題があろう。ブルジョアの道徳は不寛容なのが特徴だったかもしれないが，ジェノサイド的では決してなかったのである。ナチズムはブルジョアと反ブルジョアの要素の不安定な組み合わせであったともいえる。もしナチスが中流階級の価値観の退歩や過激化を代表しているのならば，これらの変化に至った過程を詳細に説明していく必要があろう。

しかしこの方面からのアプローチは，かなりの困難が伴う。しばしば起源と行動を直結する具体的な伝達装置，つまり歴史の因果関係が明確に示されないからである。また，ブルジョア，現代性，資本主義といった抽象的なものを告発する傾向にあり，これによってしばしばナチ特有の展開が過小評価され，歴史一般論に陥ってしまう恐れがある。しかし，正面からホロコーストの根底に潜む動機的な問題を扱っているので，少なくとも新たな側面を開拓することになろう。

(V)

モッセとは対照的に，社会学者ツィグムント・バウマンは，現代的な視点からホロコーストに取り組んでいる。彼はホロコーストを退歩的なものとして，あるいは弁証法的に現代性と矛盾したものとして考えずに，むしろ現代に固有の本質的な可能性の一つとしてみようとする立場から，体系化に努めている[45]。ホロコーストは我々が文明として理解しているすべてに由来する。ナチによるユダヤ人虐殺を「病理学の事件」としてみるべきではなく，むしろ「現代の文化的傾向と技術的達成の文脈の中で」考えなければならない。またホロコーストを単にユダヤ人の悲劇として，ヨーロッパのキリスト教によってもたらされた反ユダヤ主義の絶頂としてみるべきではなく，ドイツ人特有の犯罪としてもみるべきではないとする。というのも，そのような分析は，ホロコーストを解体し，社会学的に論理的一貫性がないものにしてしまうからである。ホロコーストは，むしろ特異性と平凡性との弁証法的な組み合わせの結果として理解されなければならない。「ホロコーストは全く平凡でありふれた孤立した要素の特異な出会いの一つの結果であった[46]」と彼はみる。

このような分析はゾンダーヴェーク的解釈に対しては有効である。ドイツ史の特殊過程や，ドイツという国家国民の特性ばかりでなく，人間の行動の普遍的で一般的な側面によっても，一定の状況下であのような出来事がおこる可能性が生じ，またそれを深く人間の可能性にするからなのである。

かくして，より一般化した普遍的で人間的な構造を重視する研究は，ナチズムやその残虐行為の根底にあるより深い次元の動機を理解するには必要不可欠なものであるように思われる。だが，もしそのような一般化された説明—例えば，ブルジョアとか啓蒙といったもの—が，何らかの方法で納得できるものであったとしても，このような一般構造と，実際に起こった出来事，つまりホロコーストが展開した特殊状況との具体的な結びつきとの関係が示されなければならない。それをしないことは，第三帝国の恐怖が，相対化した社会学的なレトリックの霧の中へと消えてしまうことを意味し，ナチス・ドイツによって何百万にも及ぶユダヤ人，シンティ・ロマ，そして他の者たちが虐殺されたという事実が，現代社会の文明の下にもジェノサイドの衝動が潜んでいるということを語ることによって，相対化され，曖昧なものに還元されてしまう，とバーリとヴィッパーマンは指摘している(47)。

ここで，ホロコーストを，そしてナチの犯罪を，著しく資本主義論理の合理的な体現として，現代化の過程における変形としてみる現代の視点に立った研究にも言及すべきであろう。ゲッツ・アーリーやズザンネ・ハイムは，ユダヤ民族虐殺は病理学や政治的不合理性の領域に位置するのではなく，むしろ構造的発展的な計画にかなった手段であるとみている(48)。彼らが主張する「最終的解決」は，合理的実利的経済の，そして武力外交の考えに基づいており，経済，人口政策，東欧圏計画といった特殊化した考えの結果とみなされる。経済的合理性の観点からは，比較的低い地位にあった専門家，つまり人口統計学者，経済学者，地理学者などは，「最終的解決」の事実上の先導者だった。「彼らは主としてイデオロギー的側面ではなく，実用的合理性の考えによって動機づけられていた。彼らは血と人種の神話には登場しなかったが，大規模な経済空間，構造的刷新，そして人口超過とそれに伴う食糧問題の分野における方針の中に姿をあらわした。彼らはより合理的な生産手段を考案し，製品を標準化し，社会構造を改良しようとした」というのである(49)。

アーリーとハイムによると，1939-41年の間に，これらの専門家たちが

ユダヤ人虐殺を合理的な理由から考案したのであり，それは対ロシア戦とともに実施されたのであった。「最終的解決は，計画を立案する下位の官吏による研究や提案から発展していき，下位から次第に上位の官僚の命令機構へと移行していった。…これらの計画立案者は…自らその決定を下しはしなかったが，上役に提言した」結果としてホロコーストが生まれたとみる(50)。彼らはポーランド固有の人口過密問題に徹底的に対処することによってのみ，強力なドイツ発展計画に着手できると思い込んでいた。この目的を成し遂げるには，その人口のかなりの割合を占めるユダヤ人というマイノリティーを除去する方法を見出すことであった。「ポーランド系ユダヤ人は救われないほど貧しく，ゲットー経済は時代錯誤であった。それは財源を圧迫した。…現代の望まれる生産水準に遙かに達しなくとも。失業したユダヤ人を輸送し殺害することは大きな節源を意味した。人口過密理論や情け容赦ない経済の合理化は内在的にユダヤ民族絶滅に対する合理的な理由となる。これは，1941年夏のナチ政権がその絶頂期にユートピア的な社会再開発計画を打ち出した時に当てはまる。そして軍事成功が悪化へと向かった時でさえ，当てはまった(51)」。

この主張は，「最終的解決」の本質は全く経済的ではないという従来の見解と意見を異にするものである。アーリーとハイムはこのため批判されたが(52)，社会や経済の立案者の役割の輪郭を描くこと，「最終的解決」はナチの東方政策に反しておきたという見方，残虐行為にも経済的側面があるという示唆などはさらに考慮されてもよいであろう。しかしそれらを考慮する際には，「最終的解決」は何故貧しいポーランド系ユダヤ人に限定されなかったのか，あるいは何故ユダヤ人がヨーロッパ全土から駆り集められのかという事実に対して説明が必要である。西欧ユダヤ人の経済的側面は，概してポーランド系ユダヤ人とは全く異なり，たいてい発達した経済圏で本質的に生産的な役割を果たしていた。しかしアーリーとハイムの分析で最も問題なのは，この「最終的解決」の問題を資本主義の現代化の原動力という観点からの分析に終始している点である。「ナチ体制のイデオロギーと実践における中心的な要素として反ユダヤ主義の重要性を過小

評価している[53]」のであり，「最終的解決がナチの（経済学，特に人口学の）テクノクラート，つまり，生産性と人口均衡回復のために絶滅政策を必要とみなす新マルサス派の考え方の信奉者により計画されたということを証明しようとする[54]」ことに固執している点である。資本主義によって絶滅への過程がもたらされたのではなく，ナチのイデオロギーの枠組みによってホロコーストは生まれたのではなかろうか。

アーリーとハイムの解釈は，この小論で取り上げた他の解釈に多く見受けられる問題を示している。ホロコーストをより好都合なコンテクストの中に置き直そうとする試みや，ホロコーストをより普遍的な構造と関係づけようとする試みは，たとえどんなに有益であっても，まず何故ナチのエリートたちや政策実行者がこれほどまでにユダヤ人問題に固執したのかということに対する十分な説明にはならない。ホロコーストへと至ったナチ体制内の機構や機能を断片的に解明はするが，「最終的解決」の背後にある反ユダヤ主義の重みを考慮に入れないのも問題であろう。というのは，反ユダヤ主義はホロコーストに不可欠な要素であったことは紛れもない事実だからである。それを考慮しないということは，強制・絶滅収容所に至る道を歪曲し，偶発事件や一般構造の一部として処理してしまうことになるからである。

(VI)

以上のようにいくつかのホロコースト解釈をみてきたが，他にも様々な解釈があり，ここで取り上げたのはそれらのほんの数例に過ぎない。ホロコースト研究の立場は従来，「意図派」と「機能派」の二つに大別されてきた。意図派は，ホロコーストは本質的にヒトラーの世界観や命令に基づいて体系的に構想・準備・実現されたものとする立場である。機能派は，ホロコーストへ至ったのは意図派のような直線的なものではなく，むしろナチ政権内は多頭支配的であり，様々な紆余曲折を経て，場当たり的な政策決定で手探りの状態で進んでいったとする立場である。この二つの立場は現在までは相争ってきたが，今後はこの両者を統合していく見方がます

ます求められるであろう。

ジャック・デリダは，我々は「今までのところナチズムとは何かということを思考する術を知らない。その仕事は我々の前に残っている…[55]」と述べている。ホロコースト・ヒストリオグラフィーが今後どのような方向に進むのかはわからない。しかしながら，その展開を見据える必要がある。最終的にはナチズムやホロコーストとは何であるかという決定的な理解に到達するであろうとか，解釈論争に終止符を打つであろうという楽観視は禁物である。それは，ナチズムやホロコーストをいかなる方法をもってしても理解できないと考えたり，歴史の不確定性を説くポストモダニズムの思想に固執しているからではない。ホロコースト問題は絶えず論議をよび，終わりがないからである。これはナチズムのような現象に当てはまるであろうし，また理論的にも方法論的にも有効な戦略が望めないホロコーストのような複合的で困難な出来事にも当てはまると考えるからである。今後もこの分野は流動的であり続けるに違いない。我々は進行しつつあるこのホロコースト・ヒストリオグラフィーの動向に，より学問的で鋭い批評の目を今後も向けていかねばならないだろう。

注

（1） Daniel Jonah Goldhagen: Hitler's Willig Executioners. Ordinary Germans and the Holocaust. New York 1996.（英語版）; Hitlers willige Vollstrecker. Ganz gewöhnliche Deutsche und der Holocaust. Berlin 1996.（ドイツ語版）

（2） DER SPIEGEL Nr. 38/12. 8. 1996, S. 40-55.

（3） 朝日新聞1996年（平成８年）６月７日号朝刊，毎日新聞1996年平成８年８月28日号朝刊。

（4） ゾンダーヴェークに関しては，ユルゲン・コッカ：『歴史と啓蒙』（肥前栄一他訳），未来社　1994年，146-163頁の「ヒトラー以前のドイツ史―〈ドイツの特殊な道〉をめぐる議論について」に簡潔にまとめてある。

（5） Saul Friedlander (ed.): Probing the Limits of Representation. Nazism and "the Final Solution". Cambridge, Mass., London. 1992.; ソール・フリードランダー編：『アウシュヴィッツと表象の限界』（上

村忠男他訳)，未来社　1994年。

(6) Haydon White : Historical Emplotment and the Problem of Truth, in : S. Friedlander (ed.) : ebd. S. 37-53. ; 同上書，57-89頁。なお，ここでは，S. Friedlander : Introduction, in : ebd. S. 6. ; 同書，24-25頁より引用。

(7) Carlo Ginzburg : Just One Witness, in : ebd. S. 82-96. ; 同書，90-118頁。

(8) Saul Friedlander : Introduction, in : ebd. S. 4f. ; 同書，21頁。

(9) Martin Jay : Of Plots, Witnesses and Judgements, in : ebd. S. 103.

(10) Thomas Nipperdey : Unter der Herrschaft des Verdachts in Historikerstreit. Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung. München 1987, S. 45.

(11) Dan Diner : Zwischen Aporie und Apologie. Über Grenzen der Historisierbarkeit des Nationalsozialismus, in : Dan Diner (hg.) : Ist der Nationalsozialismus Geschichte? Zu Historisierung und Historikerstreit. Frankfurt/M. 1987, S. 73.

(12) Arno J. Mayer : Why did the Heavens not Darken? The "Final Solution" in History. London, New York 1990, S. xiii.

(13) Nora Levin : The Holocaust. The Destruction of European Jewery, 1939-1945. New York 1973, S. xif.

(14) Elie Wiesel : Trivialising the Holocaust. Semi-Fact and Semi-Fiction, in : New York Times 16. 4. 1978, section 2.

(15) マイケル・R・マラス：『ホロコースト』(長田浩彰訳)，時事通信社 1996年，22頁。

(16) ハナ・アーレント：『全体主義の起源』第1巻 (大久保和朗訳)，みすず書房　1972年，8頁。

(17) マイケル・R・マラス：上掲書，31頁より引用。

(18) Oded Heilbronner : The Role of Nazi Antisemitism in the Nazi Party's Activity and Propaganda. A regional Historiographical Study, in : Leo Baeck Institute YearbookXXXV 1990, S. 397-439.

(19) Richard F. Hamilton : Who Voted for Hitler? Princeton, N.J. 1982, S. 606.

(20) マイケル・R・マラス：上掲書，26-39頁。

(21) Andreas Hillgruber : Zweierlei Untergang. Die Zerschlagung des Deutschen Reiches und das Ende des europäischen Judentums. Berlin 1986, S. 67.

(22) Arno J. Mayer : a. a. O.

(23) Ebd. S. 16f. メイヤーは「ホロコースト」という語は受け入れ難いとして，'Judeocide' という造語を用いている。

(24) Ebd. S. 31.

(25) Ebd. S. 226.

(26) Ebd. S. 12.

(27) この諸説に関しては，マイケル・R・マラス：上掲書，74-78頁。

(28) 例えば，Christopher R. Browning : Essays on the Emergence of the Final Solution. New York 1985.

(29) Arno J. Mayer : a. a. O. S. 201.

(30) Ebd. S. 270.

(31) Jeffrey Herf : Reactionary Modernism. Technology, culuture, and politics in Weimar and the Third Reich. Cambridge 1984. ; ジェフリー・ハーフ：『保守革命とモダニズム―ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』（中村幹雄他訳），岩波書店　1991年。

(32) Daniel Jonah Goldhagen : False Witness, in : The New Republic 17. 4. 1989, S. 40.

(32) Arno J. Mayer : a. a. O. S. 313.

(33) Michael Burleigh, Wolfgang Wippermann : The Racial State. Germany 1933-1945. Cambridge, New York, Port Chester, Melbourne, Sydney　1991, S. 22.

(34) Gisela Bock : Zwangssterilisation im Nationalsozialismus. Opladen 1986, S. 230ff.

(35) Henry Friedlander : Euthanasia and the Final Solution, in : David Cesarani (ed.) : The Final Solution. Origins and implementation. London, New York 1994, S. 51-61. ; 安楽死計画に関する日本語の著作としては小俣和一朗：『ナチス もう一つの犯罪―〈安楽死〉とドイツ精神医学』，人文書院　1995年などがある。

(36) T4とは安楽死計画のコードネームのこと。ベルリンの Tiergarten Straβe 4.（ティーアガルテン通り 4 番地）に本部が置かれたことから，この名称がついた。

(37) Benno Müller-Hill : The Idea of the Final Solution and the role of Experts, in : David Cesarani (ed.) : a. a. O. S. 62.

(38) Christopher R. Browning : Ordinary Men. Reserve Police Battalion 101 and the Final Solution in Poland. New York 1992, S. 60.

(39) Robert Jay Lifton : The Nazi Doctors. Medical Killings and the Psychology of Genocide. London 1986, S. 15-27.

(40) Zitiert nach Steaven E. Aschheim : Culture and Catastrophe. German and Jewish Confrontations with National Sozialism and Other Crises. Houndmills, Basingstoke, Hampshire, London 1996, S. 126.

(41) George L. Mosse : The Crisis of German Ideology. Intellectual Origins of the Third Reich. New York 1964.

(42) George L. Mosse : Der erste Weltkrieg und die Brutalisierung der Politik. Betrachtungen über die politische Rechte, den Rassismus, und den deutschen Sonderweg, in : Manfred Funke u.a. (hg.) : Demokratie und Diktatur. Düsseldorf 1987, S. 127-139.

(43) George L. Mosse : Towards the Final Solution. A History of European Racism. New York 1978, S. 168.

(44) George L. Mosse : Nazism. A Historical and Comparative Analysis of National Socialism. New Brunswick 1978, S.43.

(45) Zygmunt Bauman : Modernity and the Holocaust. Oxford 1989.

(46) Ebd. S. xiii.

(47) Michael Burleigh, Wolfgang Wippermann : a. a. O. S. 2.

(48) Götz Aly, Susanne Heim : Sozialpolitik und Judenvernichtung. Gibt es eine Ökonomie der Endlösung? Berlin 1987. ; Vordenker der Vernichtung. Auschwitz und die deutschen Pläne für eine neue europäische Ordnung. Hamburg 1991.

(49) Zitiert nach Steaven E. Aschheim : a. a. O. S. 132.

(50) Götz Aly, Susanne Heim : The Economics of the Final Solution. A Case Study from the General Government, in : Simon Wiesenthal Center Annual 5, 1988, S.3f.

(51) Ebd. S. 36f.

(52) 一般的な批評としては，Christopher R. Browning : German Technocrats, Jewisch Labor, and the Final Solution. A Reply to Götz Aly and Susanne Heim, in : The Path To Genocide. Cambridge 1992, S. 76. 他には，Hermann Graml : Irregeleitet und in die Irre führend. Widerspruch gegen eine "nationale" Erklärung von Auschwitz, in : Wolfgang Benz (hg.) : Jahrbuch für Antisemitismusforschung 1, Frankfurt/M., New York 1992, S. 286-95. ; Dan Diner : Rationalisierung und Methode. Zu einem neuen Erklärungsversuch der "Endlösung", in : Vierteljahrheft für Zeitgeschichte 10, 1992, S. 359-382.

(53) エンツォ・トラヴェルソ：『ユダヤ人とドイツ』(宇京頼三訳)，法政大学出版局　1996年，176頁。

(54) 同書，174頁。

(55) Jacques Derrida : Otobiographies. The Teaching of Nietzsche and the Politics of the Proper Name, in : Christine McDonald (ed.) : The Ear of the Other. Otobiography Transference Translation. Peggy Kamuf et al. (transl.), New York 1985, S. 30f. ; クリスティー・V・マクドナルド他編：『他者の耳—デリダ「ニーチェの耳伝」・自伝・翻訳』(浜名優美他訳)，産業図書　昭和63年，52頁。